

作品タイトル ◆ うらぼんえ

著者名 ◆ 伽里野 風

あらすじ ◆

盆休みの最終日、夕飯を買いに出かけた私は盆踊りに遭遇した。屋台飯を購入し、そそくさとその場を離れたものの、盆踊りが大好きだった子供時代の事を思い出していた。そしてその夜、街を踊り練り歩く不思議な一団と出会い、私は迎えられ、送り出される事となるのだった。

本編の文字数 ◆ 4228 字

どどん・が・どん 「あ よいしょ」

盆休みの最終日、夕飯を買いにコンビニへ出かけた私は盆踊りに遭遇した。

屋台から漂う焦げたソースの香ばしい香りに誘われて、会場となっている公園に足を踏み入れる。老いも若きも、なんなら国籍まで関係無く盛り上がるその光景をぼんやりと見つめていた。

良く知った古い曲だけでなく、洋・邦問わずポップスやらアニソンなんかも流れている。

あの太鼓や鉦の音で奏でる独特のリズムに乗せれば、不思議とどんな曲も盆踊りソングとなるのだなあと感心する。

「あ よいしょ」思わず心の中で合いの手を入れる。

ぎゅうう、と鳴った腹の虫の指示に従うようにして、お好み焼きと焼きそば、それからイカ焼きを買いと私はそそくさと盆踊り会場を離れた。

帰り道、薄いビニール袋を通して手の平に伝わる屋台飯の熱さを感じながら思い出していた。

「私、好きだったよなあ盆踊り」

子供の頃の私は盆踊りをとても楽しみにしていた。駅前広場に櫓が組み出すと妙にワクワクとした気持ちになっていた。

そして当日は数時間踊り続け、最後の曲まで輪にいた者だけが貰える、冷やされた缶ジュースとお菓子を誇らしげに受け取ったものだった。

あの蒸し暑い夜にひと汗かいた後の冷えたジュースはなんと美味しかった事か・・・。

そう、私は盆踊りガチ勢だったのである。

盆踊りの時はいつも同居していたおばあちゃんに手製の浴衣を着せてもらっていた。きつちりと締めた帯の背中に、お気に入りのおうちわをさしてもらい「いっといで」と背中をぽんと叩かれると妙に気合が入ったものだった。

最期の浴衣は確か小学5年生の時に仕立ててもらったものだった。私は背が高い方の子供で、祖母は「もうこれで最後で大丈夫そうね」と大人と同じサイズで仕立ててくれた。

刷毛目織りの生成り地に、赤紫の朝顔が咲いた落ち着いた雰囲気の浴衣だった。うちわは浴衣に合わせた青色の朝顔の柄で、背中に一輪だけ青い朝顔を忍ばせた私は随分と大人になったような気がしたものだ。

しかしそれが私の最後の盆踊りになったのだ。

浴衣を着せて盆踊りに送り出してくれた祖母は次の年、夏前に他界した。それ以来私は盆踊りに参加する事は無かった。

「おばあちゃんも好きだったな。よく一緒に食べたっけ」

そんな独り言が口をつく。選びきれなくて、無意識に当時と同じメニューを買い込んでいた。一人暮らしの身には多すぎる量となってしまった屋台飯をテーブルに並べると、冷蔵庫から冷えたビールを取り出した。

そして盆踊り気分を楽しみたくて、ほんの少しだけ窓を開けた。

最近猛暑の影響で在宅時はクーラーをかけたままにする事が多い。真夏に洗濯ものを干す時以外で窓を開けたのは久しぶりだ。

夏の夜の温い風につて、歪んだ盆踊りの音が聴こえてくる。

この音すら懐かしい。家から盆踊り会場へ向かう時、だんだんと音の輪郭がはっきりしてくる時に感じた高揚感、そんな事を思い出しながら私は屋台のご馳走を楽しんだ。



『明日から仕事』

私はこのプレッシャーが苦手だ。

毎週の日曜日の夕方だつて十分に憂鬱な気分になるのに、盆休み明けともなると普段の倍は気分が優れない。屋台飯とビールという完璧な組み合わせを楽しみ、良い気分ですトへ潜り込んだはずなのにちっとも眠れやしない。

深夜2時をまわったあたりで焦り出す。6時30分には起床予定だというのに・・・などと考えれば考える程眠れない。つま先が凍える程に冷房はきいているのに、背中に嫌な

汗がつたう。

これが無ければ眠れないと思うようになったのはいつ頃からだろうか。医師には1回1錠と言われていた薬だが、もう手段を選べる段階ではないと思い薬を求めてキッチンへ向かい起き上がった。

瓶から錠剤を出し水を汲んだコップで流し込もうとしたその時、開けたままになっていた窓から、太鼓と鉦の音が聴こえてきた。

「どん どど どん どど どんどんどん」

こんな深夜に何事だろうか？盆踊りはこんな夜中まで行われている訳がない。そのリズムはどんどんと近づいてきているようだった。あまりの騒がしさに、私は思わずパジャマのまま窓から身を乗り出した。

「どん どど どん どど どんどんどん」

様々な面をつけ薄墨色の衣を着たその一団は、ひよっこりひよっこりと不思議なステップを踏みながら私の住むマンションの前の道を練り歩いていた。

ふとその中の一人がこちらに向かって手招きをした。

「え？私・・・？」

遠く離れた私の問いかけが聞こえているかのように、頷くともう一度おたふく面のその人は大きく手招きした。

私はなんだか、居ても立っても居られないというような気分になり、パジャマのまま部屋を飛び出すと、その行列の最後尾についた。

「どん どど どん どど どんどんどん」

見よう見まねで、私も練り歩く。ぜんぜん知らない踊りだというのにリズムに合わせて跳ねると心が高揚する。こんな感覚はどれだけぶりだろうか？

『楽しいな』いつの間にか私は必死で踊っていた。

足元にはうつすらとした白い筋が見える。皆、その筋からはみ出ないように地面を踏み

しめている。

「どん　どど　どん　どど　どんどんどん」

地面を踏み鳴らし、踏み固められたその筋は金色の光を帯びている。

一団は知らぬ間に広々とした空き地に私を運んでいた。近所にこんな場所があったらどうか？周囲をぐるりと雑木林に囲まれたその場所は夏の夜だというのに穏やかで涼しい風が吹いていた。

夜風は草原にすつくりと伸びた幾つもの白百合を揺らす。風に揺すられた白百合達は、ぼうつ発光しているようで、さながら提灯の連なりのようだった。

行脚の集団はいつの間にか輪になり踊っている。真ん中には立派な櫓が組まれていて、太鼓の叩き手も鉦の奏者も皆、面で顔が覆われていた。周りを見渡せば皆、面をつけていて素顔でいるのは私だけだった。まあパジャマでいるのも私だけなのだが。

しかしそんな事はどうでも良いと思える程に頭の芯まで熱に浮かされ、リズムに身体が突き動かされている。いつまでも踊り続けていたい、そんな風に感じていた矢先、誰かに袖を引かれた。

「あんたはほんとに踊るのが好きだねえ。さあさ、もういいだろう。こっちにおいで」

白くふつくらとしたおたふくの面が私に話しかけてきた。聞き覚えのある声に誘われて私は踊りの輪を抜け出すと、車座を組んで飲み食いしている集団の元へと連れていかれた。おたふくの話によるとこの集団は皆、私のご先祖様なんだそうだ。確かに我が家でお盆の時期に欠かさず作られてきたお稲荷さんやら、豚汁なんかを皆嬉しそうに食べている。

「ちよつとそこの狐さん、面を外してあげてちょうだい」

周りの人達と楽し気に酒を飲み交わしていた狐面の女性におたふくは声をかけた。

「ええ嫌よう。まあ・・・でも血縁のよしみね」

声をかけられた女性が『ふふう』と含み笑いをして面をずらすと、そこには私にそっくりな顔があった。

「ええ」

私がびっくりしていると、おたふくは私にこう告げた。

「あんた、両親にも親戚にも全然似ていないって言われてきたでしょ？この方は6代前のおばあちゃんね。あんたのひいおばあちゃんよりもっと前のおあばあちゃん。私も会った事無かったけど、あんたにそっくりよね」

確かにそっくりだ。他人とは思えない。いや、おたふくの話が本当であれば他人じゃないけど。

「あんた小さい頃、拾われっ子だなんて言われてたけどそんな事ないからね」

おたふくはなんだか元氣付けようとしてくれるような気がする。氣迫に圧倒されるようにして私は頷いた。

どんちゃん騒ぎのさなか、お皿にこんもりと盛られたまんまるの白いお団子が運ばれてきた。皆、一つずつ食べては回しているようだった。私も一つ摘まみ上げると、そのもちもちとした団子を食べようとした。

するとすかさず、隣にやってきたおたふくに「ああ！だめだめ。あんたは食べちゃ駄目よ。食べたふりでもして袖の中にでも入れときなさい」とたしなめられた。

そういえばこんな事が前にもあった気がする。子供の時におじいちゃんにお酒を勧められた時だ。あの時もこんな風に止められたっけ。今のご時世ならかなりの悪い大人だよなと苦笑いする。

暫くその一団の輪の中で、皆が歌ったり、踊ったり、話たりするのを眺めていた。

そう居心地が良いわけでも無いけど、悪いわけでもない。先祖の中に混じるといいうのは不思議なものだな、などと考えていた。

「じゃあね、私達はそろそろ帰るから」

おたふくにそう告げられた時、私はどうしようもなく寂しい気持ちになった。

「少しは氣晴らしになった？」

私がうなずくとおたふくが私の頭を撫でた。

「こっちの皆ね、心配してたわよあんたの事。子孫だもの、心配なのよ。もういっそこっちに連れていこうかなんて言ってる人もいたのよ」

私が言葉を探せずにいるとおたふくは続けた。

「だからね、もう死にたいなんて思わないでちょうだいね」

その言葉につかれたように顔を上げると、おたふくは『ふふう』と悪戯っぽく笑った。

「でもどうしようもなくなったら今夜みたいに皆で盛大に迎えにいくからねえ」

あれはちよつとご近所迷惑だな、などと考えていると、徐々に声が遠のいていつている事に気が付く。

「いっついで」

私は背中をぽんと叩かれた。



「おばあちゃん、ありがとう」

やつとの事で言えた言葉は、真夜中の静かなキッチンで音量を間違えた独り言としてくつきりと響いた。

「あっあれ？」

我に返った私は左手の平にこんもりと乗った薬の量にぞっとした。

右手に握られたままのコップの水はまだ冷たい。冷蔵庫にあったミネラルウォーターは注いだばかりといった感じだった。

ひとまず薬を置いて、それから冷たい水を一気に飲みほした。

「なんだったのかな・・・？」

その時、パジャマの袖口からまああるいお団子がころりと転げ落ちた。

「あっ・・・！！」

白いもちもちとしたお団子は、金色に淡く発光するとひゆるひゆると音を立てて頭上に打ちあがった。

『ぱんっ』

炸裂音と共に、それは小さな打ち上げ花火のように空中に光を放ち霧散した。

ベットに戻り目をつむると先程までの出来事を思い出していた。来年の盆休みは実家に帰ろう。わざわざ来てもらうのも悪いし。そうだ、そしてあの浴衣を探そう。

それにしても・・・おばあちゃんは何をつけてる意味あったのかな？そのまんまみたいなもんだったけど。私はなんだか可笑しくて『ふふう』と笑っていた。

私はそうして、いつのまにか眠っていたのだった。